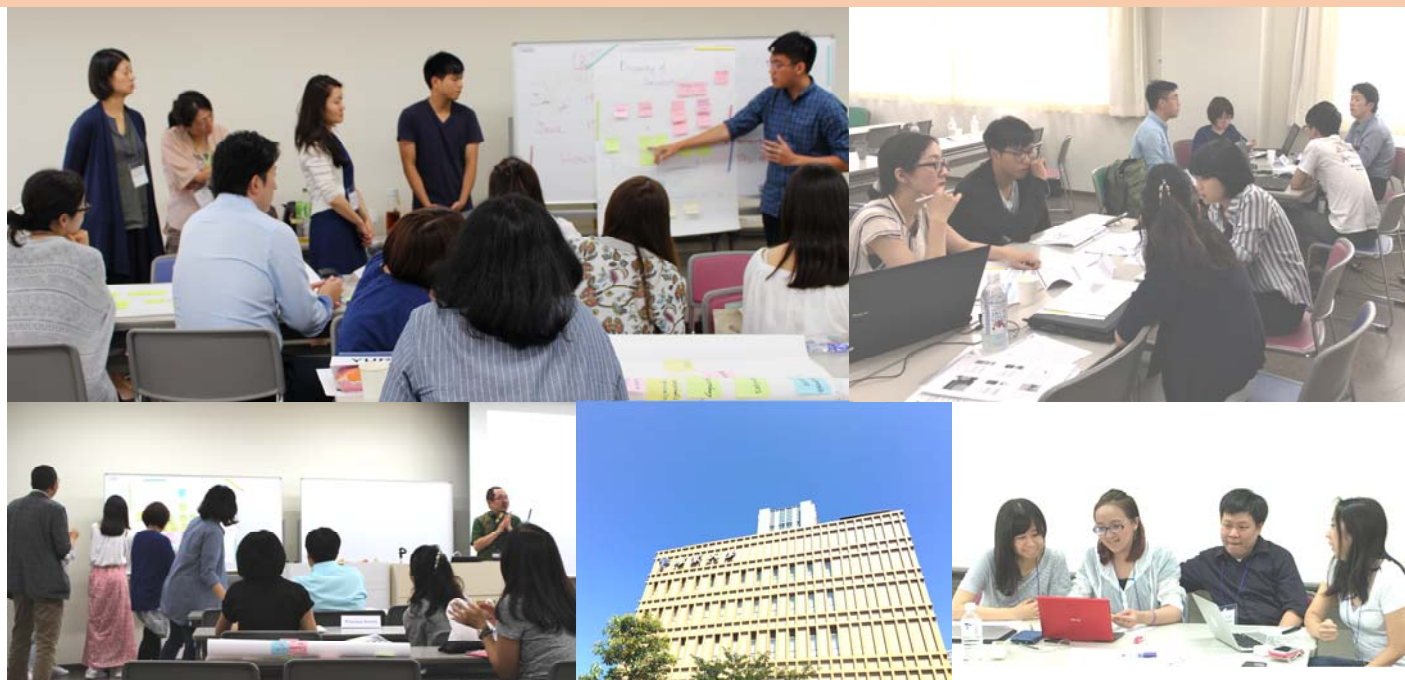




特集：帝京国際サマースクール

教室は社会と世界につづいてる

世 界の国々から、日本が1961年に達成して維持し続けている国民皆保険制度や、優れた公衆衛生政策、そして健康に長生きをする高齢者への取組や、病院のマネジメントなど、多くのことが注目されています。そんな「日本の保健医療制度や病院経営について知りたい」という帝京大学の海外学術提携校からの希望に応じる形で、第1回帝京国際サマースクールを開校しました。板橋キャンパスでは、ハーバード特別講義と並ぶ、全編英語による講義とディスカッションからなる履修科目であり、本学のSPHの学生と共に、医学部の学生、海外の学術提携校である、インドネシアのアトマジャヤ大学とプルタメディカ病院、台湾の台北医学大学と義守大学からの留学生と共に、夏学期に学びました。

本号の特集は、この2017年8月に行われた帝京国際サマースクールに注目します。コースの1つ目は、中田善規教授によるHealth Care Management(ヘルスケアマネジメント)の講義で、組織行動学を中心とした内容でした。ビジネススクールさながらの雰囲気であり、実際の病院関係者なども加わり、実践的な議論ができました。もう一つは井上まり子准教授によるUniversal Health Coverage and Ageing Population(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)と高齢化社会)の講義でした。こちらはいくつかの地元の施設訪問なども通じて、日本がこれまでに達成してきたUHCに関わる国民皆保険制度、介護保険などについて学びました。さらに、今後、世界でも類をみない速度で高齢化を迎える日本を事例にして、高齢者のみならず、すべての世代の人が健康である社会づくりについて考えました。

◎ TSPH News vol 5. 目次

特集：帝京国際サマースクール

- 2017年度後半 大学院生の活躍
- 2017年度後半の主なできごと
- 教員インタビュー 第5回
中尾睦宏 教授(社会行動科学)
- 公衆衛生ははじめの一步 産業環境保健とは？
回答者：福田吉治 教授
- 在学生バレット 今、学ぶ4名の学生の声
- TSPHコホート 卒業生を訪ねて(5)
成田祐子さん(第5期修了生・看護師)
- TSPHの窓 お仕事拝見 谷原真一 教授
- 第7回 ハーバード特別講義 予告
- 帝京SPH 第8期生募集など ご案内

特集：帝京国際サマースクール

特集では、当日の様子を写真でご紹介していきます。どちらのコースも講義だけではなく、グループワークを行うディスカッションやその成果を発表することが求められ、能動的な学習を行いました。また、講義の一部には施設の見学や外部の専門家らにお話しを伺う機会なども取り入れ、できる限り実践に即した内容のコースになるように担当者一同、心がけました。

2017.08.12.~15. Health Care Management



中田善規教授によるHealth Care Managementでは、医師であり、ビジネススクール出身の中田先生らしい授業が展開されました。教科書に基づきながらも、事例を用いたディスカッションによって理解を深めました。参加した学生には、実際に病院の人事課を統括する立場の参加者もあり、活きた教材や経験談をもとにした議論がなされました。

講義は組織行動学に関する内容で、組織内での動機づけ、リーダーシップ、問題解決や交渉術など、実践的な内容を学びました。



講義の後には、必ず理解を深められるようなグループワークが準備されており、それぞれ異なる国やバックグラウンドを持った参加者らが議論を重ねました。

意見を時間内でまとめてプレゼンテーションする能力が、日々の講義の中で高められたと思います。



SPHの学内履修生も多く、1月のハーバード特別講義と並んで、英語での講義と留学生と共に議論する国際的な学びの環境に熱心に取り組んでいました。



2017.08.21.~26. Universal Health Coverage and Ageing Population

井上まり子准教授によるUniversal Health Coverage(以下・UHC)の講義では、国連の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)の保健医療分野の一つの課題でもあり、現在の国際保健の主要課題でもある、UHCについて取り上げました。これから、アジアや世界各国で高齢化が進むことが予想されています。高齢化に関しては例を見ないスピードで進んできた日本の現状、そしてその取り組みと、戦後の日本の公衆衛生の向上と国民皆保険、介護保険などの仕組みを事例として取り上げました。

講義には、グローバルヘルス政策研究センター長でもある東京大学の渋谷健司教授、厚生労働省やWHOなどでの勤務経験がある金沢大学の町田宗仁教授、本学の高橋謙造准教授も参加し、世界でのUHCに関わる課題と取り組み、日本の保健医療の歴史の講義などから、日本の医療制度と国際社会におけるUHCのあり方についてを多面的に学びました。

UHCの講義は、通常の本学医学部衛生学公衆衛生学講座の5年生実習期間中に行われたため、一部は医学生も全編英語による授業に参加しました。最初はなかなか意見を伝えるのが困難だったようですが、講義が終わるたびに自信をつけていく医学生らが頼もしかったです。

こちらの講義でも、説明の後は課題に基づいたグループディスカッションを行いました。特に最後の仕上げでは、様々な立場のステークホルダー役に徹し、日本が今後UHCを維持するために必要な方策を議論しました。短時間ながらに力をあわせて協力し、発表を行いました。



東京大学の渋谷教授の講義の後に



厚生労働省では、国際課の関谷先生から、現在の世界のUHCの動向、そして日本政府の取り組みについて直接お話を伺う機会を得ました。



写真のご紹介がありませんが、地元の板橋区や、帝京大学の関連施設でもある、特別養護老人ホーム・さくらの杜などでお話を直接伺う機会を得ました。高齢化社会であれども多様な年齢層が生活しています。小児から若年者、高齢者までの様々な立場の人に対するUHC達成のため、日本がUHCを維持してきた行政の力について見学を通じた勉強も行いました。日々の多忙な業務の傍ら、この講義のためにご協力いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。今年の経験をいかし、より良い教育と、教育を通じた人材育成を通じ、UHCの達成への貢献を目指したいと願っています。

Team building & Communication

勉強以外のもうひとつの目的は、アジアの将来を担う若手の交流と仲間づくりです。

講義中やグループワークの時間、昼食、コーヒープレイクなど、様々なところで履修者が共に過ごす様子が見られました。

こうした若手のつながりが続き、これからのアジアと世界の公衆衛生の課題に取り組んでいくことを期待しています。



学外の関係者の皆様と共に、学内でもグローバルオフィス委員会、教務課、公衆衛生学研究科受付、山口大学からの国内留学生の皆様、SPHの教員、統括の桑原講師など、チームですべての日程に取り組むことができました。

2017年度 前半の主なできごと

4月5日 新入生オリエンテーション

英国ダラム大学教授講演とグループでの事例検討と英語の発表

新年度記念講演会は、英国ダラム大学のSt. Mary's College学長のSimon Hackett教授をお招きし、児童虐待に関する英国の現状をご講演いただきました。それを受けて、在校生が日本の児童虐待について概要を英語で説明した後、日本の児童虐待に関する事例を用いたグループワークを行いました。用いた事例は、小児科医である卒業生が実際に遭遇した事例に基づいたもので、卒業生とのコラボレーションも実現したと思います。最後はHackett先生も参加のもと、英語で検討成果を報告するという、国際色豊かな一日になりました。



7月27日 課題研究 MPH中間報告会 学会さながら。恒例の報告会

8月1日 野村恭子准教授、秋田大学教授に就任

長年、スタディクリティークや課題研究指導でお世話になった、疫学の野村恭子准教授が、秋田大学医学部の教授としてご栄転されました。先生に教えていただいた疫学や研究の素養、野村先生が室長を務められた女性医師・研究者支援センターからの支援に感謝申し上げます。益々のご活躍を、帝京SPH一同、祈念しております。



8月12～26日 第1回 帝京国際サマースクール開催

9月13日 SPH 進路支援セミナー 国際機関専門家からのお話

国際労働機関(ILO)川上剛先生(産業安全保健・労働監督上級専門家)をお招きし、ILOにおける産業保健活動や、国際公務員のキャリア形成をテーマにご講演いただきました。



9月15日 ハーバード大学 The Advancing Women in Public Health & Medicine Symposium 開催

帝京大学副学長・沖永寛子教授のハーバード大学客員教授就任を記念し、「医療と公衆衛生における女性の活躍に関する国際シンポジウム」が行われました。当日は、ハーバード大学のイチロー・カワチ教授が座長となり、本学の沖永副学長の基調講演と共に、ハーバード大学のDr. Meredith Rosenthal, Senior Associate Dean for Academic Affairs の講演、野村恭子客員教授による日本の女性医師の調査に関する講演、井上まり子准教授による女性の活躍のために必要な公衆衛生の役割に関する講演も行われました。



9月16日 帝京SPH同窓会主催 進路支援セミナー

同窓会主催の進路支援セミナーとして、「日本の医療現場におけるMPH取得の及ぼす影響」をテーマに、組織マネジメントをキーワードとして織り交ぜながら、現同窓会長の活動についてお話を伺いました。

9月28日 国立台湾大学 公共衛生学院 院長講演会

Faculty Developmentの一環として、国立台湾大学公共衛生学院 院長・教授 詹長権(Chang-Chuan Chan)先生にお越しいただき、同学院の公衆衛生教育などについてご紹介いただきました。



ようこそ帝京SPH！ 大脇和浩教授 着任 9月1日

臨床疫学の教授として、大脇和浩教授が着任されました。大脇先生は脳神経外科での臨床経験と共に、医薬品医療機器総合機構(PMDA)勤務など、臨床と研究、公衆衛生における仕事を続けてこられました。これから、疫学分野の講義を担当されます。よろしくお願い致します。

◆◆◆ 大学院生の活躍 2017年度 前半 ◆◆◆

2017年度前半の大学院生の活躍をご紹介します。また、MPHの課題研究やDrPHの学位論文に関する出版のみ、卒業生の分も取り上げます。公衆衛生活動や研究成果を公表して発信する学生たちに注目！



論文出版(原著論文)

DrPH・第1期修了生の麻生保子さんの学位論文の一部である、ごみ屋敷として社会問題化している溜め込み防止に関する介入研究の、プロトコル論文(無作為化比較試験などの介入研究の研究方法を厳密に記した論文)が出版されました。

Aso Y, et al. Effectiveness of a 'Workshop on Decluttering and Organising' programme for teens and middle-aged adults with difficulty decluttering: a study protocol of an open-label, randomised, parallel-group, superiority trial in Japan. BMJ Open. 7(6): e014687, 2017

DrPHの尾崎章彦さんらによる、東日本大震災前後の福島県相双地区における乳がん患者の受診遅れについてを示した論文が出版されました。

Ozaki A, et al. Breast cancer patient delay in Fukushima, Japan following the 2011 triple disaster: a long-term retrospective study. BMC Cancer 2017; 17: 423.

MPH卒業生 課題研究の成果が論文として公表されました。

渡邊純子他. 中学生の食事摂取量と運動習慣との関連性—熊本県の横断調査結果から—. 学校保健研究. 59(1):19-27, 2017.

論文出版(総説)

石田陽子, 他. 職場における生活習慣病対策 —データヘルスと健康経営の観点から—. 成人病と生活習慣病 2017; 47 (5):575-579.

受賞 第90回日本産業衛生学会 ポスター賞 2017年5月15日

DrPH1年生の齋藤宏子さんの研究がポスター賞に選ばれました。MPHでの課題研究成果の報告でした。おめでとうございます！
演題 「言わないと始まらない職場での母性健康管理—職場への早期妊娠報告の要因を探る」

学会発表 (筆頭演者のみ)

第49回 Asia-Pacific Consortium for Public Health Conference, (韓国・ソウル) 8月17-19日 DrPH院生2名の発表

宋 裕姫 Factors associated with sick leave due to physical illness?: retrospective cohort study in a manufacturing company.

須藤恭子 Applicability of Japanese challenges to sustainable healthcare policy for the elderly in Thailand.

第90回 日本産業衛生学会 (東京) 2017年5月 DrPH院生の発表

宋 裕姫 傷病休業と関連する因子の検討—ある製造企業における後ろ向きコホート研究.

第59回 日本老年医学会学術集会 (名古屋) 2017年6月 DrPH院生の発表

堀 紀子 前頭側頭型認知症患者の医療・介護の困難さと対処.

第1回 日本国際小児保健学会学術大会 (東京) 2017年8月 DrPH院生の発表

堀内清華 シンポジウム「国際保健の現場はこんなに楽しい」 国際保健における私のキャリアパス

第72回日本体力医学会大会(愛媛) 2017年9月 MPH院生の発表

美崎定也 人工関節とスポーツに関するシンポジウム「人工膝関節置換術後のスポーツ・レクリエーションへの参加促進の取り組み」

研究や業績、社会活動などの詳細と最新情報はTSPHオリジナルホームページをチェック！

TSPH 教員インタビュー 第5回

心と身体を結びつける。公衆衛生の基本5分野を結びつける役割。今回は柔軟性が魅力の中尾先生です。



中尾睦宏 教授 専門：心身医学、行動科学、産業精神医学

1990年 東京大学医学部卒業。2年間の東京大学医学部附属病院勤務の後、1996年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了(心身医学)。1996年 東京大学医学部公衆衛生学教室助手、ハーバード大学公衆衛生大学院への留学、ハーバード大学医学部心身医学研究所講師を経て、2001年に帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座の講師に着任。以後、2008年に教授に就任し、帝京大学SPH設立後は、基本5領域の1つ、社会行動科学領域の主任を務める。

担当授業：健康行動科学概論、リーダーシップ・マネジメント論、など

趣味：水泳、最近は散歩

今回は社会行動科学領域の中尾教授をお迎えしてお話を伺います。

－ 先生のご経歴について、公衆衛生に至る道を教えてください。

それは、「どうして医師になったのか」にも関わる話ですからそこからお話ししますね。僕は、もともと医学に興味があったものの、小さい頃の夢は数学者でしたし、大学に進学する頃は宇宙の研究に興味があって、東大では理学部などに進学する理科一類に入りました。

－ 中尾先生と宇宙の研究！それがいつしか、医学につながるのですか？

ええ。その後の進路を考えるために先輩たちと話しをする中で、自分が宇宙に興味がある本当の理由は、「存在とは何か？」「生きているとは？」「物とは何か？」といった「存在」に関する根源的な問いなのだと思いがつきました。そんなとき、ちょうど大学の図書館で、当時の東大の天文学の教授と医学部解剖学の養老猛司教授の対談を読み、宇宙に関する研究と、医学の疑問が根底でつながっていることを知りました。さらに、「身体と心を結びつけることは何か」という、まさに心身医学に関わる話題に惹かれました。こうして、宇宙への疑問とつながる医学の面白さに改めて興味を抱いて、医師になることを志しました。

－ 面白い出会いです。それで、卒業後は心身医学の道に進まれるのですか？

医学部卒業後は2年間、母校の附属病院に勤務しました。その後、先ほどお話しした心身医学への興味がありましたし、当時、ストレス科学が注目されていた

こともあって、大学院では心療内科を選びました。大学院生時代は無給で働いて、他所でアルバイトをしながら4年間を過ごし、学位を取得しました。

－ 心身医学の大学院の後、公衆衛生学教室の助手に着任されました。そのきっかけは何だったのでしょうか？

ちょうど大学院を終え、博士号を取得して30歳くらいになった頃、大学への就職を考えました。当時の指導教官から「公衆衛生学教室の助手はどうか」と言われ、そのまま就職したという、いわば偶然のめぐり合わせです。医学生だったときは、公衆衛生にはほとんど興味がありませんでした。でも、実際に臨床経験を積んで、助手になって関わりはじめてみると、公衆衛生は臨床の心身医学とも非常に親和性が高く、ストレスの疫学研究などに没頭していきました。

－ 助手時代には、米国ハーバード大学公衆衛生大学院への留学も経験されました。MPHでの留学時代を振り返られていかがでしたでしょうか。

MPHのコースが始まる前に渡米し、サマーコースから参加しました。最初はかなり大変でしたが、サマーコースで慣れていた分、新学期がはじまってからは余裕が持てました。そのおかげで、MPH在学中も学生としての勉強のほかにハーバード大学医学部の心身医学研究所のリサーチフェローを務めることができて、楽しく留学時代を過ごしました。

卒業後はその経験をかわれて、同研究所講師として1年間勤め、外来のデータ解析に携わりました。MPHで学んだ疫

学・統計の手法が役立ったと思います。

－ 帰国後は、帝京大学の医学部衛生学公衆衛生学講座に着任され、附属病院の心療内科での診療を続けられます。2011年のSPH設立後は社会行動科学領域の主任として活躍されてきました。この領域について詳しくお聞かせください。

社会行動科学領域は、医学における心身医学の役割と同じで、公衆衛生のさまざまな領域のつなぎの役割があると思っています。たとえば、公衆衛生には生物統計学などの細かなデータを分析するミクロの領域から、広くは国の保健医療政策に携わるようなマクロの領域がありますね。それらをつなぐのが、この社会行動科学領域だと思います。

公衆衛生では実際に介入するために個人へのアプローチから、集団や社会へのアプローチなど、ミクロとマクロの両方のアプローチ方法があります。それらのどのレベルにも行動科学が活かされているので、公衆衛生のミクロとマクロをつなぐ役割だと感じているわけです。

－ 行動科学というのは公衆衛生にどのように応用・実践されるのでしょうか。

行動科学の実践としては、人々の行動を健康になりやすい方向に変えることです。個人だけでなく地域の行動変容の介入として応用されていきます。こうして人々の行動を変えることを考える時、「人々を見ながら、いかに動機付けを行うか」を考えることもあります。その動機付けには、通常の診療の心療内科のスキルが役に立つことを実感しています。

● 公衆衛生 はじめの一步 産業環境保健学とは？ 回答者：福田吉治 教授

産業環境保健(学)は、産業保健(学)＋環境保健(学)を意味します。産業保健の柱として職場環境の管理(いわゆる作業環境管理)がありますので、両者を合わせた産業環境保健(学)がSPHの基本5領域のひとつになっています。

私たちの健康が外的な環境に強く影響を受けることは今も昔も変わりありません。環境保健は、地球規模から地域、あるいは居住環境まで、物理的・化学的等の環境による健康問題を幅広く取り扱います。高度経済成長の中で生じたさまざまな環境問題(いわゆる公害病が代表)を解決してきた日本の公衆衛生は、現在も多くの環境問題に悩まされている国や地域に貢献できます。帝京SPHでも、インドネシア、中国などの研究者と共同研究を行っています。

産業保健は、職場・会社を場に、働く人を対象に、職業病から作業関連疾患、メンタルヘルス、快適職場づくりまで、多様な課題を扱います。健康な人(一見?)への予防活動が主なため、公衆衛生の知識と技術が最も活かされる領域のひとつです。産業保健の専門職として、産業医、産業看護職(保健師、看護師)、労働衛生コンサルタント、安全衛生管理者、作業環境測定士などがあります。帝京SPHには、こうした専門職、特に産業医や産業看護職から多くの入学希望者があります。「すでに働いていても、さらに知識や技術を身につけたい。」「これからこの分野で働きたい。」というのが主な動機です。そのため、帝京SPHでは、以下に一部を示す多様な科目を整えると共に、帝京大学産業環境保健学センター(T-COEH)を2017年4月に設置し、日本産業衛生学会専門医および産業保健看護専門家制度、社会医学系専門医プログラム、産業保健高度専門職養成の大学院プログラムにて人材育成に取り組んでいます。興味や関心のある方は是非相談にお越しください。

産業環境保健学の主な関連科目： 産業環境保健学概論、産業保健学、産業環境保健学実習、産業精神保健学実習、産業看護マネジメント論、健康教育学、リーダーシップ・マネジメント論、ハーバード特別講義

ー テレビに出演されることも多く、話術に長けている中尾先生ですが、SPHの教育で工夫されていることはありますか。

そうですね。動画を用いるなど、動きのある講義を行って、飽きないような授業づくりを心がけていることですかね。

ー ところで、今度は研究者としての側面についてお尋ねします。先生の現在の主な研究について、教えていただけますか？

主にかかわっているのは、兵庫県加古川市での介入研究です。「棋士のまち」を掲げる加古川市は、今年の9月から、将棋を楽しんで心の健康を維持するための介入を行っていて、そのお手伝いをしています。週に一度現地を訪問して携

わっているのが、将棋の局面を例に、ものの見方などを変えてストレスを軽減する「認知行動療法」を実施するというもの。ランダム化比較試験(RCT)で介入群と対照群に分け、介入群には認知行動療法を6回行います。初回と最終回にアンケートを行って、気持ちの変化を評価していきます。

この取り組みも、最終的には高齢者の認知症予防や、高齢者と子どものつながりづくり、つまりソーシャル・キャピタルの形成に至ることを期待しています。

県のレベルでは、神奈川県未病に関するプロジェクト(主任研究者は帝京SPHの中田教授)のメンタルヘルスの部門に協力しています。また、国のレベルでは、データヘルス計画に関連して、議員連盟などの勉強会に協力しています。あとは、ミクロに戻りますが、病院で日々の診療を続けているのも研究につながっていますね。

ー 個から国まで、多様なレベルで働く中尾先生から、今、公衆衛生を学んでいる学生にひとことお願いします。

どういレベルでもいいので、SPHでの学びをいかして活躍してほしいと願っています。ご自身の人生にとっても大切なことですが、SPHで学んだ人が活躍することが、MPHやSPH、公衆衛生を世に知ってもらう手段だと思います。

あとは、世の中、どんな場所にも良いところと悪いところがあります。どこであってもサバイバルできるような適応力やたくましさ(ときに、したたかさ)を鍛えていくのが必要ではないかと思います。

ー 最後に、これから入学する人へひとこと

帝京SPHはさまざまな情報をオリジナルホームページやこのニュースレターなどで発信しています。ホームページではシラバス(講義概要)も見ることができますし、こんなに情報を公開している大学院も珍しいものです。是非、よく大学の情報をご覧になっていらしてください。

ー 先生のこれまでのご経験や留学時代のお話、そして研究のことまでを伺うことができました。地域での介入のご研究が、地元でも、そしてほかの地域でも活用されることを期待しております。本日はどうもありがとうございました。



● 藤本健一さん MPH 2年コース

1. バックグラウンド 生物学

生物資源科学系の学部出身で、大学時代は地球温暖化など、自然環境に興味を持っていました。でも、大学を卒業する頃に、国立社会保障・人口問題研究所が出版していた報告書を読み、高齢化と医療について興味を持ちました。

2. どうして公衆衛生？

今お話しした興味の変化と共に、大学卒業後に病院の医事課で働いていたことがきっかけになり、これからも医療分野で働くのならば、医療の基礎知識が必要だと漠然と思っていました。当時、国際医療研究センターの国際保健に関する勉強会に参加した際、公衆衛生という分野があることを知りました。そして、保健医療を幅広く学ぶのならば、公衆衛生を勉強してみたいと考えました。

もう一つは、自分の周りを見ていてずっと感じていたことなのですが、好きなことを仕

事にしている人は、エネルギーの強さがありますよね。だから自分も「好きなことを仕事にしたい」と思ったのも理由です。

3. なぜ帝京SPH？

まずは、幅広い分野を学べると感じたからです。一つの専門分野を掘り下げただけではなく、T字型(分野横断的な素養を備えた)人材を育成するという方針も合っていたと思います。そして講義の曜日など、通いやすかったことが挙げられます。

そして、帝京では公衆衛生に関連する多分野の先生方に相談できることも大きかったです。実際、何人かの教授にお話しを得て、実際の班会議やプロジェクト等に参加させて頂いたのも、貴重な経験でした。

4. 主に学んでいるテーマ

医療経済学、医療情報学を学び、レセプトを用いたデータ分析を勉強しています。また、研究テーマではありませんが、2年コースの利点を活かして、外部組織でのアルバイトなども経験し、様々な人に出会う機会が

ありました。実際に大学院で学んだ知識がどのように実用されて活かされているかを体感できたのは大きな学びでした。

5. 卒業後は？

医療・薬剤関係のコンサルタント(兼・研究員)の仕事に就きます。これまでSPHで学んできた、生物統計学や臨床疫学、医療系経済学の費用対効果分析を行う仕事をします。

日本では将来にわたり医療費が問題になると考えています。そのため、費用対効果や医療経済分析を用いた問題解決にニーズが高まると思います。英国には、それらを担う国立医療技術評価機構(NICE)がありますが、日本での経済評価は、まだはじまったばかりです。今後アジアなど他国でも高齢化に伴う医療費高騰が予想されていますが、医療経済を通じて世界のユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の一助を担えるといいなと思っています。やはり、政策に関わるエビデンスを提示することが、公衆衛生のミッションの1つですから。

● 永谷紫織さん MPH 1年コース

1. バックグラウンド 看護学

大学の看護医療学部を卒業後、看護師・助産師・保健師の資格を取得しました。都内の病院で勤務の後、JICA 青年海外協力隊としてラオスの病院で活動し、2017年4月に帝京SPHに入学しました。

2. どうして公衆衛生？

JICAの青年海外協力隊時代、ラオスの病院で助産師として活動する中で、新生児蘇生法や安全な分娩助産技術のトレーニング、母子手帳普及のためのプロジェクトなどを実施しました。現場で問題を認識し、ニーズを見出して活動することのやり甲斐や、おもしろさを感じた一方で、それらの活動における効果を客観的に評価する方法がわからず、「現場にとって意義ある活動ができたのか」、「本当に“何か”が変わったのか」、明らかにできなかったことに対する無力感や不甲斐なさも残りました。

国際保健の現場におけるニーズや国際的な動向、政策の立案・実施と評価と共に、論文の読み方や書き方について一から

学んでみたいと考えて、公衆衛生を学ぼうと決意しました。

3. なぜ帝京SPH？

国際保健の現場で求められることの多いMPHを、一年間で取得できることに大きな魅力を感じたからです。また、これまで、研究や論文作成の経験がまったくないため、大学院進学に対する不安も大きかったのですが、入試説明会などの場で接してくださる先生方が優しく、親身になって相談にのってくださる様子が印象的でした。それで、帝京SPHならば、自分の理解度に合わせたペースで学習できると感じて、受験しました。

4. 主に学んでいるテーマ

公衆衛生の基本5分野の必修科目に加えて、地域保健、国際保健、国際母子保健など、国際保健に関連する科目を選択して履修しています。講義以外でも、国際保健をテーマにしている学生同士が集まって、国際保健に関する世界の動向と、それに対する是非などについて、情報共有や議論を行っています。研究では、ラオスにおけ

る低出生体重児と妊婦健診の関連をテーマにして、現地で調査しています。調査は慣れないために困難も多いですが、指導教員の先生方にサポートしていただきながら進めています。これまで現場で働きながら、何となく感じていた“違和感”や“効果”を、数字にして明確に表せることの楽しさを実感しているところです。

5. 卒業後は？

今後も国際保健に携わり続けていきたいと考えています。具体的には、国連機関やJICAなどで働きたいです。その時々のお出会いと機会を大切にして、お世話になった方々に恩返しをしながら、自分の経験や知識を生かすことのできる現場で働きたいと思っています。



ラオスでのひとコマ

● 小原崇一郎さん MPH 1年コース

1. バックグラウンド 医学

臨床医で、小児麻酔と小児集中治療を専門にしています。

2. どうして公衆衛生？

大学卒業後、一臨床医として小児医療に従事してきました。その途中、カナダでの臨床留学の機会を得て、民族や人種の多様性を尊重する文化の中で、医療としても多職種・多診療科による包括的なチーム医療が果たす役割を体感しました。帰国後は、カンボジアやラオスなどでの医療支援やアジア小児麻酔学会における活動に携わる機会にも恵まれ、日常臨床の傍ら、国際保健や医療支援にも関わっています。

日本の医療の「ガラパゴス化」を感じながらも、自らの周囲に問題点を明示して、解決策を論理的に提案し、話し合いを進めることの困難さを感じていました。例えば、留学中に学んだ包括的チーム医療の重要性や必要性を認識しながら、そうした医療体制の積極的導入を具体的に立案し、関係者と交渉するという政策提言を実行に移せずに

いたからです。

こうしたなかで、身近な問題を解決するには、まずは、優れた情報収集力と、収集した情報を論理的に分析して、検討する力をつけることから始めなければならないという思いに至りました。そうした方法論のひとつとして、臨床疫学や生物統計学を習得したい、より論理的な問題解決手法を用いて問題に対処できるようになりたいと思い、公衆衛生学を学ぼうと考えました。

3. なぜ帝京SPH？

実は、勤務先の上司が帝京SPHで公衆衛生を学んでいたことから、帝京SPHの教育内容を知ることができ、自分自身の学びたい内容と合致していたことが挙げられます。帝京では働きながら学べますし、勤務先の修学部分休業制度の利用により、勤務しながらの通学が可能であったことも理由です。

4. 主に学んでいるテーマ

医学臨床研究に生かす目的で疫学や生物統計学、スタディ・クリティック(論文の批判的吟味)を学んでいます。また、今後の国際保健活動への一層の従事を目指して、

現在の国際保健情勢を知るべく国際保健分野を中心に勉強しています。

5. 卒業後は？

臨床医として勤務しながら、疫学、生物統計学を生かして臨床医学研究の実践や医学論文の批判的吟味を続けたいです。また、学んだ国際保健分野の知識を生かして、ライフワークの一つとして世界の手術・麻酔の発展と安全性の向上に少しでも貢献していければ幸せだろうなあと考えています。

6. 最後に “It’s never too late to learn”

「六十の手習い」ということばがありますが、40歳を超えてからSPHに入学した自分自身はまさしく「四十の手習い」でした。勤務との両立や高校数学の勉強し直しなど、苦勞の多い面も否めませんが、社会に変革をもたらすことを目標とする公衆衛生を学ぶのは、社会に出て問題意識を持ってこそです。

社会や世界にばかりでなく、自分自身の生き方にも一石を投じるべく、“It’s never too late to learn.(学ぶのに遅すぎるということはない)”という気持ちのもと、みなさんも公衆衛生学を学んでみませんか？

● 須藤恭子さん DrPH コース

1. バックグラウンド 看護学

看護大学卒業後、小児科の臨床で看護師として働き始めました。小児科を希望したのは、「国際医療協力の現場で働く看護師になる」という将来のプランがあったから。国際医療協力=母子保健…かな、と思っていて、大学の臨床実習終了後からもう決めていました。

その後、青年海外協力隊でパナマ国に赴任し、帰国後は大学院の進学を考えながらも、一旦は臨床に戻りました。その後、念願の大学院に進学。看護学の修士号を取得しました。その後は、看護教員として、大学で地域看護学と国際看護学の教育に従事しています。

2. どうして公衆衛生？

日本の看護基礎教育において「国際看護に関する教育」の必要性は明文化されていますが、看護教育の中で国際看護に必要な公衆衛生を系統的に学べる環境は、まだありません。そのため、国際看護学を教授するうえで、私にとって必要な公衆衛生を

一から学ぶ必要がありました。また、大学で教育に携わる以上、博士号は必須です。修士号を看護学で取得した私にとっては、博士課程で専門領域として公衆衛生を選択することがベストだと思ったからです。

3. なぜ帝京SPH？

ベースに公衆衛生の素養がなくても、専門職大学院の博士課程で系統的に学べることが大きかったです。また、指導教員との一对一のやり取りの枠や分野を超えた、本当の大講座(研究科)であることが入学説明会で感じられました。そして、こうした情報が、パンフレットの説明などと相違がなかったため、非常に印象が良かったです。

4. 主に学んでいるテーマ

アジア諸国の高齢者保健政策の実践に関する国際比較研究です。今は帝京SPHとタイのマヒドン大学との関係もあって、タイをフィールドとしています。この研究テーマに決めたのは、何より、タイにおける高齢者保健政策が国の施策の重点課題の一つであり、研究成果が根拠として、実践に活かされたと考えたからです。

実は、修士課程でもタイで調査を実施した

経験があり、深い縁を感じながら、そして10年前の關係に感謝しながら、それを生かして調査を進めています。

5. 卒業後は？

これからも大学で看護教育を続けます。公衆衛生は看護に密接に関係し、医療専門職である看護職は、公衆衛生のメインプレーヤーのひとりであるといえます。

残念ながら、保健師教育以外の現状の看護基礎教育において、公衆衛生の視点はさほど高くありません。しかし、今後ますます公衆衛生における看護の役割は高まっていくと思います。そのため、看護基礎教育において、もっと公衆衛生の理解を深める必要があると思っています。

また、私がそうであったように、看護学生にとって国際保健はとても魅力的なものです。看護基礎教育における公衆衛生の充実、看護学生の夢の実現にもつながると考えています。そんな夢を応援すべく、大学での教育に貢献していきたいです。





TSPHコホート：卒業生を訪ねて（5）

成田祐子さん
（5期修了生・看護師）

今回は、帝京の世界各地の卒業生ネットワークを活かして、独立行政法人国際協力機構（JICA）国際協力人材部

健康管理課に在籍し、在外健康管理員としてアフリカで働く卒業生をお呼びします。マラウイの「成田さーん！」

-まずは、成田さんとMPHを結ぶバックグラウンドから伺いたと思います。

故郷の札幌で高等看護学校を卒業後、地元の総合病院に看護師として14年勤務しました（小児科と外科）。その後、一念発起して、2012年からJICA青年海外協力隊（看護師）として、ウガンダで勤務しました。

-帰国後に帝京SPHに進学されたわけですが、公衆衛生を学ぼうと思ったきっかけは何だったのでしょうか？

協力隊時代、ウガンダの県立病院で5S活動*の普及と病院サービスの向上に対する支援や、村落での水衛生活動を行っていました。その際、最寄りの医療機関にもアクセスが出来ない人々のためには、病院に行かなくても元気に生活出来るための健康教育が大事だと感じたのがきっかけです。それと、現地の省庁と在外事務所、協力隊時代の活動成果を発表する機会があったのですが、きちんと評価してもらうためには数値で実証するようなスキルを身につけなければならないと感じた事も進学を決めたきっかけです。

※5S:整理・整頓・清掃・清潔・躰の頭文字をとった職場環境の改善のための活動

-そうでしたか。やはり現場での発見は貴重ですね。その後、MPH進学を選ばれますが、MPHは前からご存じだったのですか？

実は、帰国後は臨床に戻るつもりだったのですが、帝京SPHに入学した協力隊OBがいて、その方の課題研究（卒業時に求められる修士論文相当の成果）の現地調査をお手伝いするときに知りました。



-入学前から名物の課題研究をご存じで、卒業生とつながりがあったのですね。多くの大学から、帝京を選んだ理由は？

公衆衛生5分野を網羅して勉強出来る事でした。また、私は海外の経験から、日本の事を知らずして働くのは良くないと思っていましたので、国内外のことがバランスよく勉強できる環境がとても良かったです。そして、非医療系のバックグラウンドを持つ人との人脈形成が可能な事でした。

-1年間でMPHコースを修了されましたが、SPHでの学生生活を振り返って、良かったことはどんなことでしょうか？

まずは多様性の宝庫であることです。今まで20年弱、医療現場でしか働いた事がなくて、そこが世界の常識と思っていましたが、医療現場こそ世界の非常識である事を思い知らされました（笑）。

そして、Interactiveな講義形式です。自分の意見がなかったら講義に参加している意味がないので、事前に勉強して、講義の後にはお互いに不足を補いつつ、能動的な学びが出来ました。

私は統計が危機的な状況にあったのですが、同期が集中講座を組んでくれたりして、ほとんどみんなに助けられていた記憶しかありません。また、グループワークや共同作業による課題提出などもよくありました。仕事や家庭と両立している学生もいますから、皆、時間調整が大変です。でも、こうした調整能力さえ、公衆衛生家として必要なスキルが磨かれたと思います。

あとは、東京なので、色々な情報にアクセスがしやすい事もポイントでした。例えば、今までなら札幌から飛行機で来て参加するようなセミナーや講演会を、気軽に聞きに行ける事は大きかったです。今はインターネットが普及しているというものの、やはりその場にいることは大事ですから。

-成田さんの課題研究のテーマは、「ラオスにおける公衆衛生政策と肥満について」でしたね。最も印象に残っていることや課題研究で得たことを教えてください。

お世話になっているNPOのフィールドで調査させてもらったのですが、短期間でデータが取得できるかというのと、ラオス側の倫理審査が渡航3日前まで承認が下りなかったという、ドキドキの展開でした。また、調査に行く前の7月と、まとめの11～12月の期間

は、通常の講義の単位のための期末試験なども重なり、今や当時の記憶が思い出せないほど忙しかったです。

課題研究は結果だけではなく、収集したデータの限界など、実際の調査で遭遇する課題を知りえた事も大きな収穫でした。現在もNPOとは関わりを持ち続けていて、研究成果を報告することで、現地の生活習慣病改善に向けた関わりを継続しています。

-非感染性疾患(NCD)は世界でも重要な課題ですが、そこに結びつきますね。

はい。開発途上国では5歳児以下の栄養失調と、都心部での富裕層を中心にした肥満・高血圧といった生活習慣病に2極化されています。これはラオスだけでなくアフリカでも同じ傾向のように感じます。裕福さを食や物で示す（太っているのはお金持ちの証、車での移動がステータス）という考え方もあり、食習慣改善は非常に大変だという事も課題研究の調査から判明しました。住民主体でどのように食生活を改善していくかは草の根による地道な支援も必要です。地域住民からの信頼も厚く、現地語を話す青年海外協力隊の活動意義はとても大きいですね。

-さて、大変な1年間を乗り切り、MPHを取得して良かったですか？（正直にどうぞ。）

良かったですね～。5年前は一生、日本どこから札幌から出ないで人生を終えてもいいと思う位に保守的でしたので、今やこうして日本の裏側で働くとは思ってもよらなかったです。海外ではMPHという学位が非常に強く、特に開発途上国では肩書きがものをいう部分がありますので、名刺に「RN/MPH（看護師/MPH）」と書けるのは仕事上で役立ちます。そのかわり、タイトルに見合った会話が出来ないといけませんから…日々精進です。

-苦楽を共にした同期など、卒業生どうしのつながりは今でもありますか？

先日の一時帰国の時は同期会をしました！マラウイにいても、SNSを通じて連絡をとりあえる便利な世の中になったと思います。先日は、途上国に行った同期から発熱などのヘルプにSNSで対応したり。帰国時には同期がやっている地域活動に飛び入り参加したりもします。指導教官であった高橋謙造准教授には、今でも助言を仰いでいます。（そのうち、先生から講師料を請求されるんじゃないかな？！）

キーワードは レセプト、エビデンス、社会への貢献

谷原先生は2016年に帝京SPHに教授として就任されました。先生の研究について少し詳しくお尋ねします。

レセプト分析で実現したいこと

レセプト(病院や診療所の治療などで発生する診療報酬の明細書)を用いた研究をしています。レセプトデータは今は電子化されていて、すべての項目を活用することで医療の現実を把握することが出来ます。今後、**持続可能な社会保障制度を実現するためにも「どの部分を縮小できるか?」「意味のないことにお金が投じられていないか?」**は大きな課題です。その課題に応え、より意味があることに資源を配分するためには、データの活用と地道な分析でエビデンス(科学的根拠)を積み上げることが大事です。

レセプトから知る日本の統計の現状

残念ながら、現在の日本の統計には方法論上に技術的な限界があります。

たとえば、厚生労働省の患者調査は、患者さんの受診間隔が30日を超えていると、受診をやめたとみなしています。しかし、現在は、3ヶ月や半年おきに継続して通院することもあります。つまり、患者調査の結果は、現状と離れている可能性があ

り、実際はもっと患者数が多いと推定されています。

さらに日本の国民医療費は、患者さんの主傷病にかかる費用としてすべて計上されています。そのため、たとえば、実際は骨粗しょう症などほかの病気にかかっていることがあったとしても、高血圧が主傷病の患者さんについては、骨粗しょう症も含めて全てが高血圧の費用として計算されてしまうのです。ですから主傷病になりやすい病気の費用は高くなって、主傷病になりにくい病気の費用は過小評価されるという状況にあります。

こうしたデータが、政策立案やその実施の優先付けにかかわる判断の根拠になるわけですから、**正確なデータ分析は重要**です。良い政策の根拠を出すためにはこうした政府統計の見直しの提案も必要です。

主な研究テーマ

そのような背景があって、**レセプトデータの有効活用**を研究テーマにしています。分析の成果から、レセプトは感度が高く、特異度が低いデータだとわかってきました。それでも分析するときにデータの性質を考慮すれば、十分分析とその解釈・考



察に耐えられる貴重なデータです。**レセプトデータの技術的・理論的限界を明らかにして有効活用する**のが現在の研究テーマです。

ココが社会の役に立つ

薬剤費が多い日本ですが、多剤を処方されても飲まずに捨てている薬が多くあるといわれています。こうした疑問をレセプトで**実証分析**をして世に問うことが必要です。わたしの研究の結果は、国民健康保険などの組合と連携して、地域へ成果を返すことで、対象地域の医療費分析やその後の介入に役立てるようにしています。また、感染症のサーベイランスの評価などにも関わっていて、**レセプトの分析が、広く社会に貢献する可能性**を日々感じています。

-卒業後のつながりも帝京の魅力ですものね。さて、ここからは現在のお仕事について教えてください。JICAの在外健康管理員というお仕事についてお聞かせください。

在外健康管理員は、マラウイ在住のJICA関係者(常時120-150名位)が、健康で、本来の派遣目的に沿って任国に貢献できるように、安全配慮義務を遵守することが業務の柱です。要するに、駐在しているJICA関係者の健康を側面支援する役割で、企業内保健師(看護師)に近い役割ですね。日々の傷病対応、医療機関開拓、緊急時搬送支援、予防接種や健康診断など多岐に渡る業務です。事務所内に医療有資格者は私1人ですから、健康支援を一手に引き受ける形です。休日問わず毎日のように電話対応があり、トイレやシャワーの時も電話は手放せません(笑)。

-それは頼りにされていますね。忙しそうで

すが、MPHは今の仕事に役立ってますか。

JICA関係者と現地医療機関を結びつける役割があり、日本と全く異なる医療システムを利用する関係者がスムーズに診断・治療を受けるためには、関係者間の調整作業がとても大事になります。SPHで学んだ利害関係者との調整能力や、政策提言のスキルはとても役立っていると思います。

今の仕事は産業保健に近いのですが、在学中は産業保健関係に進路を決めるとは思っていませんでした。もう少し真面目に産業衛生の講義を受けておけば良かった〜と、今になって思っています。

-今後、将来にわたってどのような夢や展望を持っていっちゃいますか?

マラウイは、マラリアおよび狂犬病の流行地域ですので、関係者からのマラリア発症者のゼロ継続や、動物咬傷事例の前年度

比での減少を図るなど、健康課題の改善を数値成果を出せたらと思います。その後は、しばらく日本の保健医療現場に一度戻り、健康増進に貢献したり、将来は、海外経験を活かして看護人材の育成にも関わったら良いなと思っています。

-最後に、帝京SPHに来る学生にひとこと

授業料に見合うもの、それ以上のものを得られることは間違いありません。志の高い者どうしの意見交換は本当に刺激が多く、大人になってから学ぶことの楽しさを知ることが出来ると思いますよ。学んだ事は現場で活かさない意味がないですので、実践臨床家としてアクティブに働きたい方、「+α」を求めに帝京SPHへ。

-多くのお話、どうもありがとうございました。これからも、帝京の公衆衛生マインドを持った成田さんの活躍を遠く日本から願っています。また大学にも是非いらしてくださいね。

今年もやります！ 帝京といえば

第7回 ハーバード特別講義

◆ 社会行動科学

2018年1月開催

イチロー・カワチ先生 1月6日(土)～9日(火)

言わずと知れた、社会疫学や健康格差研究の第一人者。毎年進化する大人気の講義は授業方法の勉強にもなります。

◆ 生物統計学

Garrett Fitzmaurice先生 1月10日(水)～13日(土)

継時的データ解析の名著、『Applied Longitudinal Analysis 2nd edition』(Wiley 2011)の著者です。

◆ 疫学

Murray A. Mittleman先生 1月15日(月)～18日(木)

ケースクロスオーバーデザインの開発などに関われ、循環器疾患などの疫学研究で知られます。

◆ 保健医療政策

Alastair Gray先生 1月20日(土)～23日(火)

医療経済学的な分析の基礎的なわかりやすい講義です。
※ Gray先生のみオックスフォード大学の教授です。

◆ 環境産業保健学 ※帝京大学霞が関キャンパスで開催

Rose Goldman先生 1月25日(木)～28日(日)

小児環境保健や金属、神経毒性を中心に研究される先生です。水や大気汚染、気候変動、リスク科学などを学びます。



好評につき、今年度もハーバード特別講義を開催します。毎年、SPH学生に加え、国内外から様々な立場の方が参加する双方向性の集中講義です。帝京大学以外の方の参加方法として、以下の3パターンをご用意しています。

- 科目等履修生としての参加（単位取得可。授業の最終日に試験あり）
- 聴講生としての参加（単位取得なし）
- 1日体験コース（授業4日間のうち、好きな1日に参加できます。※各科目5,000円。5科目受講で25,000円）

参加申込みの書類はウェブサイトで公開しています。今回も多くのの方々のご参加をお待ちしております。

帝京大学大学院公衆衛生学研究科
第7回 ハーバード特別講義
Harvard Special Session 2018
2018年1月 開催

2017年10月 出願受付開始
詳しくはインターネットで検索！
帝京 ハーバード 検索
http://www.med.teikyo-u.ac.jp/~tspgh/harvard2018_top.html

開講科目	講師	開講日	講義室
Epidemiology	Murray A. Mittleman	1月15日～18日	帝京大学
Biostatistics	Garrett Fitzmaurice	1月10日～13日	板橋キャンパス
Behavioral Science / Social Epidemiology	Ichiro Kawachi	1月 6日～ 9日	帝京大学
Health Policy Management	Alastair Gray	1月20日～23日	帝京大学
Occupational and Environmental Health	Rose Goldman	1月25日～28日	霞が関キャンパス

※全科目(90分)コマで構成されており、4日間(2コマ/日)で終了します。
※科目履修等プログラムで受講の場合は最終日に試験があります。
※講義料として日本人教員による特別授業が1科目あります。
※シラバスや科目等履修生・聴講生の出願書類、1日体験受講の受講申請書はウェブ公開中です。

締切は講義開始時期によって異なるのでご確認ください。

2017年12月25日～2018年1月29日までです。

昨年、ご好評いただきました「1日体験コース(5000円)」を
今年も実施します。お仕事の都合などで、1日だけでも
聴講したい方、シラバスを参考にしていってください。

帝京SPH 第8期生募集

MPHやDrPHの学位を取得して、公衆衛生を实践する

入学試験日 2018年2月17日(土)

出願期間 2018年1月29日(月)～2月6日(火)

注) 今年度は英語の試験にTOEFL・IELTSなどのスコアが必要です。

産業保健高度専門職養成大学院プログラム

受講生募集 2018年1月10日～2月14日

産業医、産業看護職（保健師、看護師）、安全管理者・衛生管理者等の学び直しや、リフレッシュおよびキャリアアップに力点を置き、社会人等を対象とした学習履修証明（Diploma）プログラムです。

編集後記

本号からは新たな試みとして、ご要望の多かった、現役学生の声を紹介するコーナーを設けました。多様なバックグラウンドがあり、幅の広い分野の学生から4名を選ぶのは至難の業。編集者としては、嬉しくも心苦しい選択を迫られたしだい。在学生4人のお話はいかがでしたでしょうか。

このニュースレターでは、教員、在学生、卒業生についてご紹介していますが、よりよく知るには、実際にキャンパスを訪れるのが一番です。百聞は一見に如かず。今年も12月にはオープンキャンパスがあります。第7回を迎えるハーバード特別講義は学外の皆様も受講できます。是非、帝京SPHを現場で感じてください。帝京SPHが皆様を結びつけ、そして将来羽ばたくための準備の場と、多くの出会いの場になるのであれば幸いです。

発行：帝京大学大学院 公衆衛生学研究科

お問い合わせ

帝京大学板橋キャンパス 事務部教務課

〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL: 03-3964-3294 (直通)

e-mail: tspghakkui@teikyo-u.ac.jp

編集・制作：桑原恵介・井上まり子

© 2017 Teikyo University Graduate School of Public Health

Teikyo Graduate School of Public Health TSPH News vol 5 2017